

柔道授業に構成的グループエンカウンターを 導入した場合の効果について（第2報）

— 授業評価観点と態度との関係 —

大東文化大学	高	橋	進
大東文化大学	武	内	幸
和歌山大学	矢	野	勝
平成国際大学	三	宅	仁
大東文化大学	若	山	英央*

Evaluation of Instruction in University Students in the Process of Teaching Judo by Means of Structured Group Encounter

Susumu Takahashi (Daito Bunka University)
Masayuki Takeuchi (Daito Bunka University)
Suguru Yano (Wakayama University)
Hitoshi Miyake (Heisei International University)
Hidenaka Wakayama (Daito Bunka University)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the following; (1) the evaluation of instruction in university students in the process of teaching judo by means of structured group encounter; and (2) relations between the factors of good instruction for physical education class and attitude towards judo. The questionnaire consisting of 24 items which was developed by Takahashi was prepared and applied to university students whose major was physical education. Both scales were analyzed by factor analysis. Between each the factors of good instruction and attitude were analyzed by correlation analysis. The results were as follows:

1. It was suggested that four factors (teacher's interaction, learning environment, momentum instruction, and learning behavior) which were named by Takahashi were certainly pertinent for evaluating the physical education class.
2. It was clarified that the scores of all four factors which were evaluated by judo class's students in this study were very high. Therefore it was evidenced that judo teaching by means of structured

group encounter was instructive for university students.

3. Three factors of attitude towards judo were extracted from factor analysis. It was indicated that judo was desirable for improving the student's physical fitness, mental condition, and educational circumstances. In particular it was suggested that students had good images towards judo.
4. It was clarified that the three factors (teacher's interaction, learning environment, and learning behavior) concerning the evaluation of instruction had a strong influence on both the effective cognition and the affirmative affection towards judo.

I 緒言

『中央教育審議会の専門部会は4日、中学校の保健体育で「武道」と「ダンス」を男女にかかわらず1、2年生で必ず履修すべきだとする案を大筋で了承した。改定学習指導要領に盛り込み、早ければ2011年度から授業に導入する』²⁾という記事が、時事通信社によって平成19年9月4日に公開された。現行の中学校学習指導要領⁴⁾では、「武道」は必修ではなく、『第1学年においては、「武道」及び「ダンス」については、これらのうちから一を選択して履修できるようにすること』『第2学年においては、「球技」、「武道」及び「ダンス」についてはこれらのうちから二をそれぞれ選択して履修できるようにすること』『第3学年においては、「球技」、「武道」及び「ダンス」はこれらのうちから二をそれぞれ選択して履修できるようにすること』とされている。武道を専門とする保健体育教員にとって、一旦必修から外れた「武道」が、男女ともに必修として蘇ることは、喜ばしい限りである。それと同時に、武道教員は、「武道」の今日的役割や、授業としての「武道」について、より真剣に取り組まなければならないことも自明の理である。

ところで、「武道」の一領域である「柔道」に対する学習者の態度は、必ずしも良好であるとは言いがたく⁶⁾⁷⁾⁸⁾、特に、感情的側面の認知改善が急務とされてきた。貝瀬ら³⁾、高橋ら⁹⁾は、その命題に応えるべく、柔道授業におけるVTRの導入、あるいは、学習ノートの使用など、学習環境の改善による柔道学習者の柔道に対する態度変容、あるいは学習者の心理的諸側面との関連性の解明などを調査検討してきた。その結果、柔道授業における学習環境の改善、あるいは授業方法の工夫などは、学習者の柔道に対する良好な態度変容を促進することが示唆された。しかしながら、これらの研究³⁾⁹⁾では、柔道の持つ肯定的感情の変容が、他の側面に比較して満足できる変容ではないことも明らかになった。乱暴に解釈をすれば「柔道は、あるいは柔道授業は、体力や精神力を培うためには非常に効果的であるけれども、楽しさや明るさをあまり感じ得るものではない」と言わざるを得ない。更に、柔道授業の限界を暗示してしまう可能性を孕んでいる。柴田⁵⁾は、「体育における授業力」とは、「できなかった運動をできるようにしてくれる」「体育を好きにさせてくれる」「めいっぱい運動させてくれる」「もう一度やってみたい、もっとや

りたいと思わせる」等と説明しているが、上述した柔道授業の解釈と照らし合わせて鑑みれば、柔道に対する態度の解明と共に、柔道授業自体の評価を浮き彫りにする必要性が示唆される。即ち、上述した研究結果の問題点を探求するためには、柔道授業に対する学習者の評価を多面的に検討し、柔道に対する学習者の態度との因果関係を解明していくことが必至である。

そこで、本研究では、構成的グループエンカウンターを導入した柔道授業自体が、学習者にとって、良い授業であったか否かを検討し、併せて良い授業要因と柔道に対する学習者の態度との因果関係を明らかにすることを目的とした。柔道授業については、高橋らの研究¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾の中で、「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した際の効果」を検討した時の指導案を参考にし、男女大学生（共修授業）を対象に授業実施を試みることにした。その理由としては、これらの研究¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾では、既述した高橋らの研究⁶⁾⁷⁾⁸⁾結果で問題視されてきた柔道に対する肯定的感情因子の得点が低くなく、良い柔道授業要因が見出され易いと考えたからである。また、良い体育・柔道授業を生み出す条件を項目として位置づけるために、「体育授業観察者の評価構造」を明らかにした高橋らの研究¹³⁾を参考とした。

いずれにせよ、学習者の柔道授業の多面的な評価と態度との関係を明らかにすることは、新学習指導要領での中学校保健体育における男女「武道」必修化に際しての有効な一資料を提供することになる。

II 研究方法

1. アンケート用紙作成（研究第一段階）の手順

良い体育・柔道授業を生み出す条件をアンケート項目として位置づけるために、「体育授業観察者の評価構造」を明らかにした高橋らの研究¹³⁾を参考にし、良い体育授業の条件項目として、24項目を採用した。以下に、その項目採用過程を示す。

高橋らの研究¹³⁾では、過去の体育授業研究で明らかにされてきた「良い体育授業を生み出す条件」を選定するとともに、宇土によって示された「体育の授業構造」を参考とし、5次元30項目からなるアンケート用紙を作成している。また、この研究¹³⁾では、作成したアンケート用紙を用い、公開授業に参加し、授業観察をした教師を対象に調査を実施し、得られたデータから、授業観察者の授業評価観点を明らかにするために因子分析を試みている。その結果、得られた因子は、5因子（教師の相互作用、学習環境、授業の勢い、効果的学習、意欲的学習）であり、仮定的に設定した5次元の評価観点を支持することとなった。更に、「効果的学習」、並びに「意欲的学習」は、「学習行動」として統一される可能性を孕んでいること、あるいは、授業評価観点の簡潔化の観点から、因子を4次元とし因子分析を行った。本研究では、この4因子に含まれる項目を参考とし、各因子（教師の相互作用、学習環境、学習行動、授業の勢い）から6項目を選定、計24項目の採用に至った。

ところで、本研究の目的は、緒言で述べたように構成的グループエンカウンターを導入した大学体育柔道授業自体が、良い授業であったか否かを検討し、併せて良い授業要因と柔道に対する学習者の態度との因果関係を明らかにすることであり、調査対象者は、大学生である。

一方、高橋ら¹³⁾のこの研究は、アンケート回答者が現職の教師であるため、得られた因子構造が、大学生にとっても一般化できるかどうかを再認する必要性も否めない。そこで、本研究では、研究の第一段階として、採用した授業評価観点24項目を良い体育授業条件とし、大学生にそれぞれの項目について、良い授業と感じる程度を尋ねることとした。更に、得られたデータについては、因子分析的手法を用い、その評価観点の構造についての検討を重ね、その上で、柔道授業評価並びに授業に対する態度を問うアンケート用紙の作成を試みることにした。

2. 調査の実施（研究第一段階）

2007年7月、D大学スポーツ健康科学部・スポーツ学科3年生100名を対象（内60名が教員志望）として、「教科教育法（保健体育）Ⅰ」の前期試験時に、上述した24項目に、「性別・内訳は表1参照」、「大学でのクラブ活動状況・表2参照」、「地域でのスポーツ活動状況・表3参照」、「志望職種・表4参照（教員志望は60%）」などの属性を問う項目を加えアンケート調査を実施した。

表1 対象者の性別（D大学生）

項 目	frequency	%	cum%
男 性	75	75.0	75.0
女 性	25	25.0	100.0
total	100	100.0	

表2 大学における運動クラブ活動状況（D大学生）

項 目	frequency	%	cum%
活動している	62	62.0	62.0
活動していない	38	38.0	100.0
total	100	100.0	

表3 地域でのスポーツ活動状況（D大学生）

項 目	frequency	%	cum%
活動している	26	26.0	26.0
活動していない	74	74.0	100.0
total	100	100.0	

表4 志望職種（D大学生）

項 目	frequency	%	cum%
中 学 校 教 員	16	16.0	16.0
高 校 教 員	43	43.0	59.0
大 学 院 進 学	2	2.0	61.0
大 学 教 員	1	1.0	62.0
スポーツ指導者	16	16.0	78.0
そ の 他	22	22.0	100.0
total	100	100.0	

3. 調査の処理（研究第一段階）

①良い授業条件の程度を尋ねる24の設問に対して、大変思う「4」、思う「3」、あまり思わない「2」、全く思わない「1」の4段階で回答させ、それぞれに得点を付与した。

②「良い授業条件に関する24項目」の評定値に対して、共通性の推定値を1.0とした主因子解に

よる因子分析を、軸を4次元に固定して施した（反復推定あり）。

- ③その結果、固有値1.0以上である因子は8因子抽出されたが、4軸固定のため、Varimax回転後の因子は4因子となった。
- ④因子の解釈に際しては、因子負荷量0.4以上の項目を原則とした。
- ⑤得られた因子構造と、高橋らの研究¹³⁾で明らかにされた因子構造の類似性の検討を試みた（結果の詳細については、Ⅲ 結果と考察－1に示す）。

4. アンケート用紙作成の手順（研究第二段階）

- (1) 柔道授業の評価を問うアンケート項目作成のために、Ⅱ－3で得られた因子構造と、高橋らの研究¹³⁾で得られた因子構造の類似性の検討を試みた。その結果、本調査で得られたそれぞれの因子に含まれる高い負荷の項目は、必ずしも、高橋ら¹³⁾の示した「授業評価観点」4因子を構成する項目と全て一致した訳ではないが、大よその類似性を示唆することとなった（結果の詳細については、Ⅲ 結果と考察－1に示す）。

また、24のアンケート項目の内部一貫性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出したところ、0.879の高い値を示した。従って、これら24項目全ては、大学生自身が受講した「体育授業の良し悪し」の程度を判定するために有効であると判断した。但し、「教師の説明が簡潔な授業」を「教師の説明が簡潔な授業であった」という様に、全ての項目表記を修正し、アンケート項目として採用することとした。

- (2) 柔道に対する学習者の態度尺度については、高橋ら¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾の尺度を一部修正し使用した。それぞれの項目は、感情的成分と認知的成分から構成されている。尚、構成内容は、4次元20項目（肯定的感情、否定的感情、身体鍛錬、並びに精神鍛錬）とした。

5. 調査の実施（研究第二段階）

2007年度、U大学教養科目、「実技柔道」を履修選択した男女学生53名（2クラス分・男女共修）を対象に、前期実技授業回数13回（90分授業）の最終講義・7月末に、「性別・表5参照」、「学年・表6参照」、「大学でのクラブ活動・表7参照」、「地域での活動・表8参照」、「高校でのクラブ活動経験・表9参照」、「中学でのクラブ活動経験・表10参照」、「柔道授業の評価」、並びに「柔道に対する態度」を問うアンケートを実施した。当該授業計画については、高橋らの研究¹⁰⁾「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について」で用いた指導案（14コマ分）を修正し13コマ分とした。また、指導者は、講道館柔道6段、海外、少年指導を含めた指導歴20年を超える熟練指導者である。尚、調査対象者の授業出席率は、99%であった。

表5 対象者の性別（U大学生）

項 目	frequency	%	cum%
男 性	17	32.1	32.1
女 性	36	67.9	100.0
total	53	100.0	

表6 対象者の学年（U大学生）

項 目	frequency	%	cum%
1 年 生	51	96.2	96.2
4 年 生	2	3.8	100.0
total	53	100.0	

表7 大学でのクラブ活動状況（U大学）

項 目	frequency	%	cum%
活動している	35	66.0	66.0
活動していない	18	34.0	100.0
total	53	100.0	

表8 地域での活動状況（U大学）

項 目	frequency	%	cum%
活動している	3	5.7	5.7
活動していない	50	94.3	100.0
total	53	100.0	

*活動している内 運動系クラブ活動者 22名（41.5%）

表9 クラブ活動の経験（高等学校）

項 目	frequency	%	cum%
未 実 施 群	12	22.6	22.6
運 動 部	26	49.1	71.7
文 化 部	15	28.3	100.0
total	53	100.0	

表10 クラブ活動の経験（中学校）

項 目	frequency	%	cum%
未 実 施 群	6	11.3	11.3
運 動 部	35	66.0	77.3
文 化 部	12	22.6	100.0
total	53	100.0	

6. 調査の処理（研究第二段階）

- (1) アンケート項目の「柔道授業の評価」と「柔道に対する態度」以外については、適当な回答に○印をするか、該当する答えを記入させた。統計処理については、各項目の頻度並びに%を算出した。
- (2) 「柔道授業の評価」については、それぞれ感じる程度を、大変思う「4」、思う「3」、あまり思わない「2」、全く思わない「1」の4段階で回答させ、それぞれに得点を付与した。また、高橋ら¹³⁾の示した4観点に含まれる項目の合計得点を項目数6で除した4評価得点を算出し、本研究対象授業の良し悪しを判断する基準とした（教師の相互作用得点、学習環境得点、学習行動得点、授業の勢い得点）。
- (3) 「柔道に対する態度」については、その構造を確認する意味から以下の手順で統計処理を行った。
 - ① 大変思う「4」、思う「3」、あまり思わない「2」、全く思わない「1」の4段階で回答させ、それぞれに得点を付与した。
 - ② 「態度に関する20項目」の評定値に対して、共通性の推定値を1.0とした主因子解による因子分析を施した（反復推定あり）。
 - ③ アンケート作成の際に、過去の高橋らの研究^{6) 7) 8) 10) 11) 12)}を考慮し、尺度を4次元と仮定したので、4軸固定し、Varimax回転を施した。

- ④因子の命名・解釈に際しては、因子負荷量0.5以上の項目を原則とし、解釈可能な範囲で命名を行った。
- ⑤解釈・命名可能な因子については、因子平均点を算出した（因子の個人得点＝各因子に含まれる因子負荷量0.5以上の項目のうち因子を代表すると判断できる項目の評定合計得点÷項目数）。
- (4)「学習者の柔道授業の多面的な評価」と「柔道に対する態度」との因果関係を明らかにするために、授業評価尺度（4観点）と、態度尺度の2変数間の積率相関変数（ピアソン）を求めた。

尚、本研究による全ての計算処理は、SPSSX プログラムによって行われた。

III 結果と考察

1. 大学生にとっての良い体育授業要因構造

Varimax 回転後（4軸固定）の抽出因子及び因子負荷量を表11に示した。この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は6因子（表12参照）であるが、4軸に固定しての因子分析のため、Varimax 回転後に抽出された4因子について解釈を行うこととした（回転後の4因子の貢献度の合計は、全分散の49.2%であった。尚、因子の解釈における因子負荷量の基準は、原則として0.4以上とした）。

表11 大学生にとっての良い体育授業要因構造

因子	項目	因子負荷量
F1:「授業の勢い」に類似	V2 移動や待機の場面が少ない授業	0.508
	V14 授業の場面展開が、スムーズに行われる授業	0.698
	V23 運動学習の時間が十分に行われる授業	0.560
	V24 準備や後片付けが、手際よく行われる授業	0.700
	V8 生徒・学生の上達が確認できる授業	0.412
	V13 生徒・学生の笑顔や拍手、歓声などが見られる授業	0.573
	V5 教師が積極的にほめたり励ましたりする授業	0.458
	V19 個々の生徒・学生の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）	0.519
F2:「学習行動」に類似	V1 生徒・学生同士が、積極的に教えあう授業	0.764
	V3 生徒・学生が自ら進んで学習する機会がある授業	0.556
	V9 生徒・学生が意欲的に学習に取り組んでいる授業	0.794
	V4 楽しく学習できるような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）	0.667
	V21 安全配慮がなされている授業	0.564
	V10 教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業	0.463
F3:「教師の相互作用」に類似	V7 教師が積極的に適切な助言をしている授業	0.584
	V10 教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業	0.445
	V16 教師の表現や表情が豊かである授業	0.538
	V17 教師が、生徒・学生の意見や気持ちを受け入れている授業	0.643
	V18 能力の低い生徒・学生に積極的に関わっている授業	0.487
	V6 授業での約束事・取り決めが守られている授業	0.667
	V12 学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業	0.453
F4:「学習環境」に類似	V11 学習成果を生み出すような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）	0.670
	V12 学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業	0.668
	V19 個々の生徒・学生の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）	0.517
	V20 十分な施設や用具が準備されている授業	0.732
	V15 生徒・学生が、何を学習し、何を身に付けようとしているのかが良く分かる授業	0.570

* 因子負荷量0.4以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

表12 相関行列の固有値

因 子	固有値	貢献度	累積貢献度
1	6.814	28.391	28.391
2	1.888	7.868	36.259
3	1.734	7.224	43.484
4	1.371	5.714	49.197
5	1.297	5.406	54.603
6	1.119	4.661	59.265

- (1) 第1因子については、「V2・移動や待機の場合が少ない授業」「V14・授業の場面展開が、スムーズに行われる授業」「V23・運動学習の時間が十分に行われる授業」「V24・準備や後片付けが、手際よく行われる授業」「V8・生徒・学生の上達を確認できる授業」「V13・生徒・学生の笑顔や拍手、歓声などが見られる授業」「V5・教師が積極的にほめたり励ましたりする授業」「V19・個々の生徒の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）」などの項目に0.4以上の高い因子負荷量を示した。V2、V14、V23、V24の項目は、授業マネジメントにおける重要な条件を示しており、高橋ら¹³⁾の示した「授業の勢い」因子を構成する6項目の内の4項目である。従って、第1因子は、他の授業評価構成要素（V8、V13、V5、V19）を含むものの、その「授業の勢い」因子と類似構造を持つ因子と判断することとした。
- (2) 第2因子に含まれる因子負荷量の高い項目は、「V1・生徒・学生同士が、積極的に教えあう授業」「V3・生徒・学生が自ら進んで学習する機会がある授業」「V9・生徒・学生が意欲的に学習に取り組んでいる授業」「V4・楽しく学習できるような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）」「V21・安全配慮がなされている授業」「V10・教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業」であった。V1、V3、V9については、良い体育授業で展開される生徒・学生の学習行動を示唆している。また、V4、V21は、その学習活動を促進する良好な学習環境を示している。この2観点から鑑みれば、複合的な「授業評価観点」を持つ因子とすることができるが、高負荷項目を示す項目の半分以上が「学習行動」を示すことにより、第2因子を、高橋ら¹³⁾の示す「学習行動」を主体とする因子と解釈した。
- (3) 第3因子では、「V7・教師が積極的な助言をしている授業」「V10・教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業」「V16・教師の表現や表情が豊かである授業」「V17・教師が、生徒・学生の意見や気持ちを受け入れている授業」「V18・能力の低い生徒・学生に積極的に関わっている授業」「V6・授業での約束事・取り決めが守られている授業」「V12・学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業」7項目が、0.4以上の因子負荷量を示した。V7、V10、V16、V17、V18は、高橋ら¹³⁾の示す「授業評価観点」の「教師の相互作用」因子を構成する5項目である。この要因が「授業成果」を規定する¹⁾としているように、授業における教師のあるべき姿を示しているといっても過言ではない。いずれにしても、第3因子

は、高橋ら¹³⁾の示す「教師の相互作用」因子と大変類似している因子と考えられる。

(4) 第4因子に高負荷を示す項目は、「V11・学習成果を生み出すような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）」「V12・学習資料（学習ノート・カードなど）が有効に活用されている授業」「V19・個々の生徒・学生の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）」「V20・十分な施設や用具が準備されている授業」「V15・生徒・学生が、何を学習し、何を身に付けようとしているのかが良く分かる授業」の5項目であった。V11、V12、V19、V20は、それぞれ授業実施に際しての、理想とされるべき学習環境を示している。と同時に、高橋ら¹³⁾の「学習環境」因子とオーバーラップすることも明確になった。従って、第4因子は、高橋ら¹³⁾の「学習環境」因子と類似構造を有する因子であると解釈した。

以上の如く、抽出された4因子の構造を、高橋ら¹³⁾の「授業評価観点」4要因との対比の中で解釈・検討を加えてきた（表13・構造比較表）。その結果、既述のように（Ⅱ-4-(1)）、高橋ら¹³⁾の研究で示された「授業評価観点」要因と、本調査で抽出された因子とは、その類似性が示唆されたものの、全く同一構造にはならなかった。本調査対象者は、スポーツ健康科学部の3年生であり、教員志望が60%に及んでいるが、教育実習などの経験を積んでおらず、授業実施経験の不足が、このような現象の原因とも考えられる。高橋ら¹³⁾の研究では、その対象者が現職の教員であり、その事実を勘案すれば、本調査対象者についても、実際の教育経験によって、更なる因子構造の精選が図られるかも知れない。

いずれにしても、「授業評価観点」である「授業の勢い」「学習行動」「教師の相互作用」「学習環境」の4要因は、大学生にとっても、自身が受講した「体育授業」を評価するための要因であると判断し得る。また、24のアンケート項目の内部一貫性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出したところ、0.879の高い値を示した。このことは、24項目全てが、大学生自身が受講した「体育授業の良し悪し」の程度を判定するために有効であることも示唆している。

従って、「教師の説明が簡潔な授業」を「教師の説明が簡潔な授業であった」という様に、全ての項目表記を修正し、柔道授業の評価を測定する項目として24項目全てを採用することとした。

表13 体育授業要因構造比較表

因 子	大学生（抽出因子に含まれる項目）	授業評価観点
F1:「授業の勢い」	V2 移動や待機の場面が少ない授業 V14 授業の場面展開が、スムーズに行われる授業 V23 運動学習の時間が十分に行われる授業 V24 準備や後片付けが、手際よく行われる授業 V8 生徒・学生の上達が確認できる授業 V13 生徒・学生の笑顔や拍手、歓声などが見られる授業 V5 教師が積極的にほめたり励ましたりする授業 V19 個々の生徒・学生の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題）	移動や待機の場面が少ない授業 授業の場面展開が、スムーズに行われる授業 運動学習の時間が十分に行われる授業 準備や後片付けが、手際よく行われる授業 教師の説明が簡潔に行われる授業 授業での約束事・取り決めが守られている授業
F2:「学習行動」	V1 生徒・学生同士が、積極的に教えあう授業 V3 生徒・学生が自ら進んで学習する機会がある授業 V9 生徒・学生が意欲的に学習に取り組んでいる授業 V4 楽しく学習できるような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題） V21 安全配慮がなされている授業 V10 教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業	生徒・学生同士が、積極的に教えあう授業 生徒・学生が自ら進んで学習する機会がある授業 生徒・学生が意欲的に学習に取り組んでいる授業 生徒・学生の上達が確認できる授業 生徒・学生の笑顔や拍手、歓声などが見られる授業 生徒・学生が何を学習し、何を身に付けようとしているのかが良く分かる授業
F3:「教師の相互作用」	V7 教師が積極的に適切な助言をしている授業 V10 教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業 V16 教師の表現や表情が豊かである授業 V17 教師が、生徒・学生の意見や気持ちを受け入れている授業 V18 能力の低い生徒・学生に積極的に関わっている授業 V6 授業での約束事・取り決めが守られている授業 V12 学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業	教師が積極的に適切な助言をしている授業 教師が心を込めて生徒・学生に関わっている授業 教師の表現や表情が豊かである授業 教師が、生徒・学生の意見や気持ちを受け入れている授業 能力の低い生徒・学生に積極的に関わっている授業 教師が積極的にほめたり励ましたりする授業
F4:「学習環境」	V11 学習成果を生み出すような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題） V12 学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業 V19 個々の生徒・学生の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題） V20 十分な施設や用具が準備されている授業 V15 生徒・学生が、何を学習し、何を身に付けようとしているのかが良く分かる授業	学習成果を生み出すような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題） 学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業 個々の生徒・学生の能力に応じた運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題） 十分な施設や用具が準備されている授業 楽しく学習できるような運動が用意されている授業（教材・場作り・学習課題） 安全配慮がなされている授業

2. 構成的グループエンカウンターを導入した大学体育柔道授業評価

高橋ら¹³⁾の示した4観点に含まれる項目の合計得点を項目数6で除した4評価得点を算出し、本研究対象授業の良し悪しを判断する基準とすることは既述（Ⅱ-6-(2)）のとおりである。

尚、以上の手順で得られた平均評価得点については表14に示した。その結果、「授業の勢い」は、 $3.761 \pm .311$ （点）、「学習行動」は、 $3.752 \pm .427$ （点）、「教師の相互作用」は、 $3.827 \pm .317$ （点）、並びに「学習環境」は、 $3.469 \pm .322$ （点）であり、本調査授業の全ての「授業評価観点」得点が、非常に高いことが示唆されると同時に、「柔道授業への構成的グループエンカウンター導入」の有効性を支持することとなった。

以上を概観し、以下に詳細なる考察を加えることとしたい。

表14 柔道授業評価得点

因子名	平均得点	標準偏差
F1 : 「授業の勢い」	3.761	0.311
F2 : 「学習行動」	3.752	0.427
F3 : 「教師の相互作用」	3.827	0.317
F4 : 「学習環境」	3.469	0.322

(1) 「授業の勢い」について

この「授業評価観点」は、いわゆる「授業マネジメント」の良し悪しを示唆する要因であることは周知のとおりである。特に、学習の「効率化」「合理化」、あるいは、それによって実現される「体育授業の普遍的な目標」の一側面である「実質的な運動時間の確保」が、為されているか否かは、体育授業にとっては生命線である。高橋ら¹³⁾も、授業を円滑に進める基礎的な条件の一つとして「授業マネジメント」をあげているが、体育授業の枠組みを規定する重要な要因であることに異論を唱える者はあるまい。そのように考えると、本授業も円滑に授業推進が為されたと評価できるが、その原因が、「構成的グループエンカウンターを導入」に起因すると判断することは、あまりにも乱暴である。むしろ、授業者が、指導熟練者であることによる影響が大きく働いているせいではないか。いずれにせよ、推論を脱することはできないため、指導者のキャリア、あるいは専門性によって「授業の勢い」「授業マネジメント」に対する学習者の評価に如何なる差異が生じるのかを、柔道授業場面において確認することを今後の一研究課題としたい。

(2) 「学習行動」について

調査対象U大学の体育授業は、2単位必修制を残している学部（教育学部）もあるが、「実技柔道」を選択した学生の所属学部は区々である。更には、同一コマに複数の「体育実技」種目が用意されていることから、本履修学生は、自ら進んで「柔道」を選択していることにもなる。このような積極的な履修行動は、当然、授業に対する動機付けを高めるため、本調査結果「学習行動」得点の高さに反映している可能性は否めない。しかしながら、履修行動の影響が加味されたとしても、アンケート実施が最終授業終了後であり（総括的評価）、授業内容の「良し悪し」によって、その評価が変容を来たすことは言うまでもない。いずれにしても、学習者が、積極的・意欲的に授業に取り組めたということは、本調査授業が、「良い授業」であったということを示唆していることに相違はあるまい。

(3) 「教師の相互作用」について

「教師の相互作用」は、授業を進めるに当たっての、教師の生徒・学生に対するあるべき姿を示している「授業評価要因」といっても過言ではないため、当然ながら既述したとおり、「授業成果」を規定する重要な要因である。しかしながら、一般的な柔道授業の場合、安全管理の立場から一斉指導の中で、それも教師の指示のみで授業が展開されるケースが多く見られ

る。いわば「教え込む」授業が主流となってきた。「教師の相互作用」の良し悪しが、「授業の雰囲気」を決定すると高橋ら¹⁾も述べているが、従来の柔道指導の場合、「授業の良い雰囲気」作りに困難を来たすのは自明の理であろう。その点、「構成的グループエンカウターの柔道授業導入」によって、生徒・学生と教師、あるいは生徒・学生間でのコミュニケーション量が増加することは言うに及ばず、必然的に「授業の雰囲気」に変化が現われることも容易に想像できる。

ところで、柔道自身を運動構造的に捉えれば、相対的な運動であり、もともと学習者間のエンカウターを実現させる機能を有していると考えられる。従って、その機能を有効的に引き出す（例：寝技の乱取りに際して、自己紹介をさせる。あるいは、実施後に握手、あるいは勝者が、敗者をマッサージするなど）ことによって、より良好な授業展開が為される筈である。本調査における柔道授業は、正しくその機能を引き出した結果であろう。しかしながら、より詳細な「授業研究」の必要性は否めない。「エンカウター運動を如何なる場合に適用するか」、「タイミング」は、あるいは「どの段階」で、あるいは「形成的に評価を確認」していくなど解明課題も山積みである。

(4)「学習環境」について

「授業評価観点」4要因の中で、「学習環境」得点が、一番低い得点（決して低い評価ではなく、寧ろ高評価である）を示しているが、「V11・学習資料（学習ノート・カード）が有効に活用されている授業であった」の項目得点が、 2.1321 ± 1.05680 （点）とかなり低いことが原因と考えられる。実際本調査における柔道授業では、「学習ノート」「学習カード」は活用しなかったため、この評価は当然であろう。

さて、「学習環境」は、施設・用具・資料などといった「物理的環境」と、適切な学習課題の蓄積、場作りの旨さ、教材の豊富さなどの「学習内容環境」とに大別されるが、施設・用具には限りがあるため、「学習内容環境」の充実を図らなければならないことは、授業者としては当然のことである。その点では、既述した「教師の相互作用」との関連から鑑みて、「構成的グループエンカウターの導入」が、特に「良好な場作り」を提供する一助となることは、「学習環境」得点が示すとおりである。

3. 柔道に対する態度構造並びに態度尺度の評価

Varimax 回転後（4軸固定）の抽出因子及び因子負荷量については、表15に示した。この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は6因子（表16参照）であるが、4軸に固定しての因子分析のため、Varimax 回転後に抽出された4因子について解釈・命名を行ったが、解釈・命名可能な因子は、3因子であった（回転後の3因子の貢献度の合計は、全分散の53.7%であった。尚、因子の解釈における因子負荷量の基準は、原則として0.5以上とした）。

表15 柔道の態度に関する因子分析結果

因 子	項 目	因子負荷量
F5：社会化を伴う心身鍛錬因子	V31 持久力を向上させる	0.681
	V32 筋力を向上させる	0.715
	V34 身体的な健康を維持・増進させる	0.646
	V35 忍耐力を養う	0.728
	V36 協調性を養う	0.730
	V37 社会性を養う	0.613
	V39 リーダーシップを養う	0.535
	V43 達成志向性を養う	0.540
F6：否定的感情因子	V28 つらい感じがする	0.858
	V29 痛い感じがする	0.792
	V30 苦しい感じがする	0.848
F7：武道的精神の涵養を伴う肯定的感情因子	V25 明るい感じがする	0.560
	V29 楽しい感じがする	0.560
	V30 爽やかな感じがする	0.785
	V42 礼儀正しさを養う	0.569
	V43 達成志向性を養う	0.528
	V44 プライドを向上させる	0.621

* 因子負荷量0.5以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

表16 相関行列の固有値

因 子	固有値	貢献度	累積貢献度
1	4.744	24.969	24.969
2	3.602	18.958	43.927
3	1.862	9.800	53.727
4	1.358	7.289	61.016
5	1.049	5.523	66.539
6	1.010	5.314	71.852

(1) 第1因子では、「V31・持久力を向上させる」「V32・筋力を向上させる」「V34・身体的な健康を維持・増進させる」「V35・忍耐力を養う」「V36・協調性を養う」「V37・社会性を養う」「V39・リーダーシップを養う」「V43・達成志向性を養う」などの項目に高い因子負荷量を示した。V31、V32、V34は、柔道実践による身体への鍛錬効果を示唆する項目であり、V35、V36、V37、V39、V43は、柔道をとおした精神の鍛錬効果を表わした項目と解釈できる。特に、「協調性」「社会性」「リーダーシップ」の涵養については、いわゆる精神力の中で、社会化に必要な条件と言うこともできる。

従って、この因子は、「身体面」、並びに「社会化の促進を主とする精神面」、両面の涵養を表わす因子と解釈することが可能であり、「社会化を伴う心身鍛錬因子」と命名することとした。

(2) 第2因子に高い負荷量を示した因子は、「V28・つらい感じがする」「V29・痛い感じがする」「V30・苦しい感じがする」であった。これらは、正しく柔道に対する否定的な感情を示している。よって、この因子を「否定的感情因子」と命名した。

(3) 第3因子に負荷量の大きな項目は、「V25・明るい感じがする」「V26・楽しい感じがする」「V27・爽やかな感じがする」などの柔道に対する肯定的な感情を示唆する項目と、「V42・礼儀正しさを養う」「V43・達成志向性を養う」「V44・プライドを向上させる」という柔道の持つ武道的な精神性に対する肯定的認知を示す項目であった。この両側面を考慮して解釈し、

「武道的精神性の涵養を伴う肯定的感情因子」と命名した。

因子の構成内容を「肯定的感情」、「否定的感情」、「身体鍛錬」、並びに「精神鍛錬」と仮定し、4軸固定して因子分析を進めたが、以上の結果は、3因子が解釈・命名されるに過ぎなかった。しかしながら、第一因子は、認知的成分を示唆する「身体鍛錬」「精神鍛錬」の2成分が統合された因子であり、因子の構成内容を4軸とした仮説が棄却されるものではない。また、その因子構造についても、高橋、矢野らの先行研究⁶⁾⁷⁾とほぼ同様な因子構造を有していることが支持された。

- (4) 解釈・命名した因子の評価得点（因子平均得点）については、表17に示してある。その結果、「社会化を伴う心身鍛錬因子」は、 $3.436 \pm .459$ （点）、「否定的感情因子」は、 $2.491 \pm .854$ （点）、「武道的精神性の涵養を伴う肯定的感情因子」は $3.409 \pm .514$ （点）であった。

以上の結果を要約して考察を加えれば次の如くである。

- ①柔道が精神や身体に及ぼす効果的側面への認知は、高橋の研究⁶⁾⁷⁾⁸⁾を支持するべく良好であった。特に、柔道が社会化を促進し、武道の特徴である徳性（礼儀、努力、自立）の涵養に有意義であると捉えられていることは、柔道学習・あるいは柔道そのものの社会的価値を示唆するものである。
- ②感情的にも、否定的傾向は認められず、かなり肯定的に評価されていることが明らかとなった。この結果は、高橋ら¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾の「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した際の効果」を検討した研究結果を再認することにもなった。

いずれにしても、以上の結果は、2011年から実施される中学校での「武道必修化」に際して、「構成的グループエンカウンターを活用した授業」導入が有効的であることを物語っていよう。

表17 態度尺度得点

因子名	平均得点	標準偏差
F5：社会化を伴う心身鍛錬因子	3.436	0.459
F6：否定的感情因子	2.491	0.854
F7：武道的精神の涵養を伴う肯定的感情因子	3.409	0.514

- (5) 「学習者の柔道授業評価」と「柔道に対する態度」との因果関係

「授業評価観点」4要因と、態度尺度の2変数間の積率相関係数（ピアソン）を求めた結果を表18に示した。

その結果、「授業評価観点」の内、「学習行動」、「教師の相互作用」、「学習環境」に対する評価が高い程、柔道に対する「効果的認知」あるいは、「肯定的感情」が有意に良好であることが窺えた。

ところで、柔道学習者の態度にとって問題視されてきたことは、柔道に対する「感情的側面」

の低い評価であった⁶⁾⁷⁾⁸⁾。態度が、行動要因に影響を与えることは周知のとおりであり、この問題が解決されない限り、古くからの伝統的運動文化への理解と愛着が深まらないことも自明の理である。しかしながら、上述した結果が示す如く、「いわゆる良い授業」は、学習者の柔道に対する態度の両側面（認知的側面、感情的側面）を良好にし得る可能性を孕んでいることが明らかにされた。特に、「柔道授業は、他のスポーツ種目と異なり、『楽しさ』の享受は必要がない」と断定されてきた感は否めず、体育科教育学的見地、あるいは学習心理学的見地からの研究が不足をしていたことも事実であるため、この結果は、これからの柔道学習に対しての一指針と成り得よう。また、「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入」することは、「柔道授業」を「良い授業」へ導く一方法であり、柔道に対する学習者の深い理解と認知、あるいは、柔道に対する愛着を深める可能性を示唆するものでもある。

いずれにせよ、今後は、「柔道学習の様々な形態」に焦点を当て、教科教育学的、学習心理学的見地から更なる研究を進めていきたい。

表18 授業評価観点と態度尺度との相関関係（ピアソンの積率相関係数）

尺度（変数）	F5		F6		F7	
	相関係数	有意水準	相関係数	有意水準	相関係数	有意水準
F1	0.105	N	0.229	N	0.078	N
F2	0.549	**	0.039	N	0.379	**
F3	0.342	*	0.067	N	0.272	*
F4	0.523	**	0.030	N	0.515	**

*……相関係数は5%水準で有意

**……相関係数は1%水準で有意

N……相関係数は有意ではない

IV まとめ

本研究の目的は、「構成的グループエンカウンターを導入した大学体育柔道授業」自体が、良い授業であったか否かを検討し、併せて良い授業要因と柔道に対する学習者の態度との因果関係を明らかにすることである。特に、研究の第一段階では、採用した授業評価観点24項目を良い体育授業条件とし、大学生にそれぞれの項目について、良い授業と感じる程度を尋ねることとした。更に、得られたデータについては、因子分析的手法を用い、その評価観点の構造についての検討を重ね、その上で、柔道授業評価並びに授業に対する態度を問うアンケート用紙の作成を試みることにした。

尚、柔道に対する態度については、その構造を再認する目的から因子分析的手法を用いた。また、良い授業要因と柔道に対する学習者の態度との因果関係を明らかにするため、ピアソンの積率相関変数を求めた。結果については、以下の如くである。

- (1)「授業評価観点」である「授業の勢い」「学習行動」「教師の相互作用」「学習環境」の4要因は、大学生にとっても、自身が受講した「体育授業」を評価するための要因として適当であると判断し得る。
- (2)「授業の勢い」は、 $3.761 \pm .311$ (点)、「学習行動」は、 $3.752 \pm .427$ (点)、「教師の相互作用」は、 $3.827 \pm .317$ (点)、並びに「学習環境」は、 $3.469 \pm .322$ (点)であり、本調査授業の全ての「授業評価観点」得点が、非常に高いことが示唆されると同時に、「柔道授業への構成的グループエンカウンター導入」の有効性を支持することとなった。
- (3)柔道の態度構造を示す因子は3因子であった(「社会化を伴う心身鍛錬因子」「否定的感情因子」「武道的精神性の涵養を伴う肯定的感情因子」)。
- (4)柔道が精神や身体に及ぼす効果的側面への認知は良好であった。また、感情的にも、否定的傾向は認められず、かなり肯定的に評価されていることが明らかとなった。
- (5)「授業評価観点」の内、「学習行動」、「教師の相互作用」、「学習環境」に対する評価が高い程、柔道に対する「効果的認知」あるいは、「肯定的感情」が有意に良好であることが窺えた。
- (6)「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入」することは、「柔道授業」を「良い授業」へ導く一方法であり、柔道に対する学習者の深い理解と認知、あるいは、柔道に対する愛着を深める可能性を示唆するものである。

註

※大東文化大学協同研究員

引用・参考文献

- 1) Borich, G.D. Effective Teaching Methods. Merrill, 227-232, 1988.
- 2) 時事通信社：中学で「武道」を必修化＝「伝統」育成，男子のダンスも－中教審，2007，<http://www.jiji.com>.
- 3) 貝瀬輝夫・高橋進・矢野勝・菅原正明：高校生の柔道授業に見る意識変容について－技術的指導段階にVTRを導入した場合－，東京学芸大学紀要5部門，37：193-202，1985.
- 4) 文部科学省：中学校学習指導要領，1998，http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301c.htm.
- 5) 柴田俊和：「授業力」を磨くことで「教師力」は高まる，大修館，体育科教育9月号，26-29，2007.
- 6) 高橋進・矢野勝：柔道に対する中学生の態度構造について，関東学園大学紀要，14：137-144，1988.
- 7) 高橋進・矢野勝・磯村元信：柔道に対する女子高校生の態度構造－男子高校生との比較から－，関東学園大学紀要，16：109-115，1989.
- 8) 高橋進・貝瀬輝夫・菅原正明・矢野勝・森藤才・若林眞：大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について－認知的側面と感情的側面の比較－，武道学研究，22-1：33-44，1989.
- 9) 高橋進・高瀬博：柔道授業における高校生の態度変容について－学習ノートを使用した場合－，群馬栃木保健体育学研究，12：9-18，1993.
- 10) 高橋進・貝瀬輝夫・村田直樹・齊藤聡・平野弘幸・矢野勝・桃澤博之・中村一成・三宅仁：柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について，講道館科学研究会紀要 第九輯，157-179，2002.
- 11) 高橋進・野瀬清喜・三宅仁・江田香織・濱田初幸・高野千春：大学生の柔道に対する態度と自己形成意識

- との関連性について－自尊感情、本来感、自己受容を中心に－，埼玉武道学研究，6：25-32，2006.
- 12) 高橋進・貝瀬輝夫・加曾利正美・野瀬清喜・三宅仁・江田香織・濱田初幸・高野千春：大学生の授業選択行動要因に関する研究－スポーツ価値意識と柔道に対する態度並びに他の心理的側面との関連性について，講道館科学研究紀要 第十一輯，129-144，2007.
- 13) 高橋建夫・長谷川悦示・日野克博・浦井孝夫：体育授業観察チェックリスト作成の試み－観察者の評価観点の構造をてがかりに－，体育学研究，41：181-191，1996.